

1. 活動の名称・詳細

談話分析ワークショップ

[日時・会場]

2012年6月11日（月）9:00～12:00 慶應義塾大学SFC κ棟11号室

[ワークショップ講師・参加者・人数]

米国クラーク大学教授の Dr. Michael Bamberg 氏・中浜優子研究会メンバー・10名

[概要]

多文化共生社会での円滑なコミュニケーションのための基盤構築を目指す本研究会で最も多く研究がなされているテーマは、第二言語での談話分析や発話行為研究等の、言語運用能力についてのものである。そこで、ナラティブ分析を含む談話分析の理解を深めてもらうために、同分野で多数の著書を持ち、世界各国で数多くの講演をなさっている Michael Bamberg 氏を招聘し、談話分析の中でも特にナラティブに焦点を置いたワークショップを開催した。

2. ワークショップの意義と成果

上述のように、本研究会では言語運用能力に関する研究が多く行われている。例えば、英語非母語話者間の会話内での談話標識使用、多言語話者間の会話におけるコードスイッチング、第二言語としての英語で行う発話行為のタスク遂行時に見られる協働的知識構築のプロセス、ナラティブ産出におけるピアラーニングの効果について等である。研究会履修生の全員が最初から基礎的知識を持ち合わせているわけではないため、ワークショップ形式で2コマ分時間を割り、二話者間の会話分析に関する実践的知識構築を図ってはいるが、十分であるとは言い難い。しかし、理論的側面も教授する必要性、各人のテーマにおける基礎的文献の紹介・指導も考えると時間的余裕がないのが実情である。そこで、談話分析（ナラティブ分析）で世界的に著名な Michael Bamberg 氏を招聘し、ナラティブの分析に焦点を置き教授いただくことにより、履修生に、そもそも談話とは何か、ナラティブとは何かを自ら発見してもらえないかと考え、当ワークショップの開催に至った。

ワークショップの内容として、最初は基礎的なディスカッション（「ストーリー」の定義付けから始まり、ナラティブの構造について）をし、研究会生自らの体験をもとに「ストーリー構築」にかかわる要因について考えるという機会を持った。ストーリーとは何かについてそれぞれの思うところを話し合い、定義付けを行った後、**Anger Management** という映画のナラティブ（モノローグ）及びダイアログの部分画像と脚本を照らし合わせ、分析を行った。映画のタイトルの通り、今回取り扱ったナラティブは、今までに自分が一番怒りを覚えた経験（**Anger Narratives**）についてのものであった。「死に直面したような恐怖体験のナラティブ」は、**Labov (1972)**を始め、多くの研究者に取り上げられているが、今回の「怒りのナラティブ」は、ナラティブの分野で更なる開拓が期待されているトピックであり、自己のポジショニング表出を促す優れた題材であると言える。

映画の「怒りのナラティブ」を分析する際、インタビューアーの役目、インタビューされる側（ナラティブを産出する側）の質問に対する理解等、様々な観点からのナラティブの捉え方を教示いただいた。映画内での怒りのナラティブ分析を終えた後、ハンズオンのエクササイズとして、ワークショップ参加者が自らのナラティブを二種類産出した。まず、1) 今までに最も自身が怒りを覚えた経験、そして2) 今までに誰かをひどく怒らせてしまった経験についてそれぞれ、筆記でナラティブを作成した。履修生はこの二種類のナラティブで、それぞれの経験における自らのポジショニングの違いにより、異なる言語形式が抽出されることを学ぶことができた。今回は英語でのナラティブであったが、その傾向の普遍性を追求することが今後の課題とされる。具体的には、日本語と英語のナラティブの対照分析の重要性が示唆され、その結果を踏まえ、今後の通言語的研究へと導いていけるのではないかと考え、当該分野への貢献が大いに見込まれる。

今回のワークショップの実現により、研究会履修生の基礎的知識の構築だけでなく、実践的な談話（ナラティブ）分析能力向上にも繋がった。また、この分野で活躍されているナラティブ分析の第一人者である **Bamberg** 氏から教授を受け、また議論を交わすことは、同分野を研究する学生にとってこの上ない機会であり、自信にも繋がったことは間違いない。将来学会発表等の機会での質疑応答の練習にもなったのではないかと考える。ワークショップ参加者のうち、2名がナラティブ分析に非常に興味を持ち、今後、自身の研究に取り入れてみたい、と意思表明をした。卒業論文、修士論文へとつなげるようアドバイスをしていくつもりである。